

シリーズ「COPD(慢性閉塞性肺疾患)」①

COPD(慢性閉塞性肺疾患)

独立行政法人国立病院機構 和歌山病院

院長 南方良章

皆さんは、COPD(慢性閉塞性肺疾患)という病気を「存知でしようか。これは、主に喫煙により慢性的に気管支や肺が傷害を受け、構造が変化し、細い気管支の空気の通りが悪くなる病気です、以前は肺気腫や慢性気管支炎などと呼ばれていた疾患です。今回は、このCOPDについてのお話を進めさせていただきます。

よく似た病名で、肺気腫と慢性気管支炎があります。肺気腫とは、肺胞が破壊され見た目に肺がスカスカになった状態で、病理学的変化に基づいてつけられた病名です。一方、慢性気管支炎とは、慢性的な咳嗽や喀痰が一定期間以上持続するという、症状に基づいてつけられた病名でありません。しかし、たいいていの場合これらは併存しており、しかも喫煙という同一の原因から生じていることより、これらを一つの疾患単位としてCOPDとしてまとめられます。

COPD患者では、細い気管支の空気の通りが悪い(気流制限)ため、動いたとき時の息切れや咳、喀痰などがみられることがあります。しかし、例外症状を自覚しない場合もあります。COPDは、スパイロメトリーと呼ばれる呼吸機能検査にて一定の値より機能が低下し、気流制限を認めた場合に診断されます。一般に、健康な人でも、年齢とともに肺は老化し呼吸機能は低下していきます。しかし、喫煙者では健康な人より速く呼吸機能が低下し、年齢の割に機能が悪くなり、やがてCOPDの状態に陥ります。すなわち、COPDとは、肺年齢が高齢化した状態を意味しています。呼吸機能がある程度残っている状態ではそれほど自覚症状もなく、多少症状がみられたとしても、「年齢のため」と自分で納得されCOPDの存在に気付かない場合も多くみられます。

その結果、我が国で約530万人の患者数があると推定されているのに対し、実際診断されている人は23万人程度(厚生労働省報告)で、診断率は10%にも満たず、ほとんどの人が未診断の状態で見つかれていないのが現状です。さらに、スパイロメトリーの結果が正常範囲でCOPDではない

一方で、喫煙者ではすでに呼吸機能低下が始まっており、非喫煙者より呼吸機能が低下すなわち肺年齢の高齢化が認められているとの報告もあります。

禁煙をすることで呼吸機能の低下速度は緩やかにはなります。そのため、将来の呼吸機能低下(すなわちCOPDの進行)を緩やかにすることが可能です。さらに、症状に応じた吸入気管支拡張薬の使用により、壊れた肺は元には戻らないものの、末梢気道の空気の通りがある程度改善し、症状が緩和されることも、肺年齢の若返りも可能であります。そのため、少しでも早くCOPDの存在に気づき禁煙を行い、必要に応じて吸入気管支拡張薬を使用することは極めて重要で、そのためにはにも早期に診断を受けることが極めて重要です。

スパイロメトリーは健康フェアなどで行われることもありますが、病院にお越しただくと実施可能です。COPDになっていないか、あるいはCOPDには至っていないかとも肺年齢が高齢化していないかなど、現在の肺の状況を知っておくことは極めて重要です。

40歳以上の方で喫煙歴のある方は、一度はスパイロメトリーを受けることを是非ともおすすめします。

COPD患者では、細い気管支の空気の通りが悪い(気流制限)ため、動いたとき時の息切れや咳、喀痰などがみられる